

九重山麓の婚姻習俗

藤原正教

七〇

蝶よ花よと育てた娘　今宵あなたにあげますほどに　末はよろし

く頼みます　ヨイヤナ

あの子両親ふところそだち　西も東もわからぬ故に　万事よろし

く頼みます　ヨイヤナ

この哀調を帯びた古雅な韻律で名高いヨイヤナ節は、豊後朽網郷、いまの久住町を中心とする九重南山麓一带に唄われている古風な民謡である。その起こりは慶長のころ、京大阪で流行した弄斎節の流れをくむとか、伊予の今治地方に唄われていたものが、久留島氏の豊後森への転封とともに移し植えられたともいわれているが、いずれにせよ、婚礼の席で唄いだされるこの歌は、一度きけば忘れることのできない印象を与える。

この九重南麓の白丹・久住・都野・七里田の各部落は、旧藩時代に肥後領・竹田(岡)領に分れていたため、部落を境にして民俗上異なつた様相がみられることは興味あることである。たとえば名子たちが

主家から休日をもらう、いわゆる「名子のお別れ日」は、岡領では旧十二月二十五日で、「名子の正月」を二十九日に行なつて、一月三日から主家の労働に従事する習わしであるが、肥後領では二月二日から「名子の正月」、この日で一年間の仕事を終わって帰らせる習慣である。これについて肥後領側では、「岡藩のところは、正月のご馳走を食べさせないために正月前に帰らせるが、肥後領では、一年中よく働いてくれるから、正月のご馳走をじゅうぶんに食べさせてから名子別

れをするのだ」などといっている。また二十日正月の行事でも、岡領では骨正月といつて正月中の食物を全部食べて正月神を送るというが、肥後領では「二十日バツタイ」といって、とうもろこしを煎つて粉にし、お茶にたててねりものにして食べる——「ハツタイになつて正月様が吹いていく」と考えていて、骨正月という意識は全然みられない。

こうした傾向は婚姻習俗にも多少みることができるところ。この地方もかつてはほとんど村内婚であつたが、最近では日帰り程度の範囲というのが大半で、そのうえ血統・家柄・財産などを重大な条件と考える家本位の結婚観が強く、よそからの「流れもん」(この付近ではよそ者をヌレワラジと呼んでいる)や「庭んもん」(名子)に対する差別はきわめてはっきりしている。そのため、婚姻に関する若者組の機能も次第に零落し、わずかに「松入れ」や「石打ち」などにその面影を止

めている程度である。若者宿も婚姻の機会を与えるためというよりは夜なべ仕事をやる場所と考えられている。

婚約は二段階からなっており、最初の承認を得るときを「ヒギワメ」

後の結納を「オタル」という。仲人がたびたび訪ずれて頼みこみ、承諾を得ればその場でキメ酒を酌み交わして結納の相談をする。肥後領側ではこの酒をカナメの酒といい、婚約をキワメをするといっている。結納は婚礼の二、三日前が普通で、ヒギワメのときに話し合つて嫁の着付け・綿帽子・髪飾り・下駄・傘などを嫁方から贈り、引出物として袴などが贈られることが一般である。

婚礼の日、嫁方から嫁迎えが行くが、岡領の都野では、仲だちと嫁方の父、女が一人、それに馬方（荷物運び）が行く。肥後領の白丹では、馬方は顔中墨を塗っていくし、さらに嫁が同行して嫁方に嫁入りする習俗がある（養子ならば嫁御入りが行なわれる）。嫁は親戚のしぼしまで足袋や手拭いをくばり、嫁の両親や親戚の人と順に盃を交わすが、それがすむと「聲逃げ」といって無断で逃げ出す。あまり永くいると水をかけられたりするし、あまり遠方であれば途中まで逃げて嫁の行列を待っていたりする。都野部落での嫁入りは婚礼後三日、三ツ目とか三日帰りといって、新夫婦と両親・仲立ちが嫁の家に行く。嫁は丸鬘で嫁入り衣装で帰る。これが嫁の初入りであるが、正式の挨拶

は祝言のときにしてから改まってはしない。このとき嫁方の部落の若者たちがのぞき見をするが、これは婚礼の夜の「石打ち」にあたるものであろう。

婚礼の夜、嫁がいよいよ家を出るに際しては、嫁は鉄漿かぶをつけ肩を落して別れの膳につく。そして縁側から出るが、これはこの付近の出棺の作法と同じである。「鳥も古巣に二度帰りやせぬ。二度と帰るなわが故里へ、夫を頼りにおらしやんせ、ヨイヤナ」という気持からであらうか。嫁が馬に乗ると馬方はツボを三遍廻つて、「花咲かば、告げんと言いし山里の……」の謡曲「鞍馬天狗」の一節をうたう。嫁の行列は仲立ち・父母（または兄か姉妹）・ヨメゴワキ、次に嫁・荷物運び・そして迎えの者の順でならば、部落の若者たちが石を置き材木を横たえて、ときには糞尿をまいて行列の通行を妨げるのも、かつては嫁が若者たちの共有と見なされていたころの名残りであろう。

行列が嫁入り先のツボに着いて、仲立ちから順に軒端に並ぶと、「エンヅケ」といって盃をやり看をつまんでやる。仲立ちから初めて嫁が最後に飲むが、このとき嫁方は「高砂」をうたう。それがすむと嫁は縁側から上り、「手引き」といって、嫁方の親戚の女に手を引かれ、ナイシヨを通じてナンドに入る。次いで仲立ち二人・嫁わき・聲・聲ワキ・酌取り（男蝶・女蝶、両親の揃つた末子）が入って三々九度の

盃をする。嫁がナイシヨヤナンドにまず入るといふことも、主婦の生活ぶりに思い合わせて興味あることである。ムコ盃・ヨメ盃、そして親子盃がすむころ、頬かぶりをした若者頭が「松入れ」にやつてくる。

牛馬のハミ桶に土をいっばい詰めて松を立て、卑穢な歌を書いた短冊を数枚吊り下げてある。主人と若者頭が盃を交わしているあいだ、主だった若者たちが軒端にならんで「高砂・松高き」をうたう。そして今度は、若者たちに盃をまわしているあいだに、鞞方は「松誉め」をする。卑穢な文句を巧みに変えながら、短冊の歌を読みあげる苦勞はなみ大抵でないという。この松入れの終わるころから、他の若者たちが戸をがたがたさせたり、障子をねぶって穴をあけたり、石や土などを投げこんで悪戯をする。これを「石打ち」と呼んでいるが、これがかつて村内婚当時の若者組の婚姻に関する力が、次第にうすれていったことに対するせめてもの抵抗であろう。若者たちは、こうして貰った三升ほどの酒を呑み交わして、失なわれた若者組の婚姻主宰権の昔話を思いを致すこともあるであろう。

松入れが終わると、「オテツキの吸物」といって、搗き餅に味をつけたものを全部の人が食べ、次いで飲みごとに移り、本膳が出る。嫁の膳には鼻つき飯を出し、箸には性的な象徴を彫りこんで、嫁がまごつくのを喜ぶが、これも以前は新夫婦二人で共同に食べて、結合を強

化する類感呪術的な儀礼であったのかも知れない。こうして祝言の夜は夜通し寝ないので床入りは翌晩行なわれる。祝言に集まつた人々が帰るときは、「ワラジだ、ワラジだ」といって、手当り次第に茶碗をつきつけてワラジ酒を呑ませる。

結婚した次の初正月には、年取りの日に鞞方から上段七升、下段一斗三升の大鏡餅を嫁の餅といつて里方に贈る習わしである（普通の年は二升餅を二重ね、それに足袋・反物・年魚をそえる）。貰った嫁方では、この餅で「鏡直し」といって雑煮をつくり、親族を招んでご馳走をする。そして岡領では正月二日に夫婦そろって正月歩きに里帰りをするが、そのとき上段の七升餅を半分持って帰らせる。肥後領ではこれを「親鏡」といい、正月十五日の里帰りまで飾っておいて、夫婦が来ると「鏡開き」といって下の方を食べ、上の方を持って帰らせる。そして両地方とも、鞞方では、持ち帰ったこの餅を、祝言のときに饂飩をくれた家々に「鏡直し」といって配る習いになっている。これらも他地方に広く見られる力餅の習俗に連なるもので、米のもつ力を認め、それをともに食べ合うことによつて、不可分の連鎖を作ろうとする意識にもとづくものであろう。